

女子卓球団体戦で中国に勝つ秘策はあるのか！

さて、シングルスは、伊藤選手と石川選手に決まり、そして、次の「三番手」を誰にするかが「大きな話題」となっているが、普通に考えれば、平野選手か早田選手のどちらかということになる。そして、例えば、「伊藤・石川・平野」選手の三人であれば、最初のダブルスは、「石川・平野」選手であり、シングルス二回は、伊藤選手となる。これで「中国」に勝てるのか？ むろん、分からないが、今までの「対戦成績」から見て、恐らく、勝てない。

だとすれば、「伊藤・石川・早田」選手ということになる。この場合、最初のダブルスは、「伊藤・早田」選手であり、シングルス二回は、石川選手となる。これで「中国」に勝てるのか？ むろん、分からないが、恐らく、勝てない。つまり、どのような「組み合わせ」をしたところで、所詮「中国」には勝てないという結論になるのである。恐らく、その通りになるかと思うが、それでは、いわゆる「女子卓球団体戦」で中国に勝てる「秘策」は、もうどこにもないということなのか？

さて、ここからがまさに今回の「本題」であるが、それは、次のようなものである。まず、次の「三番手」を誰にするかは、必ず、「平野選手」でなければならない。その理由は、「二つ」あり、一つは、彼女の「実績」から見ても、まさに妥当な選出であり、多くの人たちが納得できるものになるからである。もし、「早田選手」にすれば、恐らく、大変な「騒動」になりかねないからである。そして、もう一つの「理由」は、予選を勝ち上がらなければならない。そのためには、この「伊藤・石川・平野」選手がベストであり、そして、補欠は、「早田選手」とするのである。これを見た中国側は、まあ、そうだろうな、という反応になるかと思う。

さて、補欠の「早田選手」は、使ってもよいが、できるだけ使わないようにして、いわば「隠し球」として、その「手の内」を見せないようにするのである。もし、予選の段階で、「伊藤・石川・平野」選手で負けた場合は、もう仕方がないのである。そして、順当に勝ち進んで、決勝で「中国と対戦」となった場合、次のようにするのである。

まず、「伊藤・石川・平野」の三選手の誰が一番状態がよく、また、誰が一番状態が悪いかをよく見極めて、一番状態の悪い選手を「外（はず）す」のである。もちろん、三人とも「ベスト」であれば、そのまま使えばよい。[ただ、伊藤選手を外（はず）すことは難しい]。それゆえ、「石川選手」か「平野選手」のどちらかを外（はず）して、補欠の「早田選手」を入れるのである。

さて、これで、一体、何がどう変わったというのだろうか？ それは、相手の「意表をつく」（つまり相手の予想をくつがえして、相手の動揺を誘うという作戦）である。宮本武蔵は、その『五輪書』の中で、次のように言っている。「……敵、山と思わば、海と仕かけ、海と思わば、山と仕かける心、これ兵法の道なり」とある。つまり、「……相手の思いも寄らないことを仕かけて、相手の動揺を誘い、相手の本来の力を出させないうちに勝ってしまう」という作戦である。つまり、中国側は、恐らく、「早田選手」についての「徹底的な研究」は、（補欠なので）それほどしないだろうと思うからである。そこに「つけ入るチャンス」があり、中国選手は、意外に「はつもの」に弱いからである。（むろん早田選手は、はつものではないが。）

そして、補欠の「早田選手」が入れば、最初のダブルスは、「伊藤・早田」選手であり、これで何が何でも勝たなければならない。これで負ければ、それですべては終わりである。そして、次の「二番手」は、「石川選手」か「平野選手」のどちらか状態の良い方、次の「三番手」は、伊藤選手で、これも何が何でも勝たなければならない。ここで負ければ、すべてが終わりである。そして、次の「四番手」と「五番手」で「一つ」を勝ちに行く。もちろん、最大限の卓球技術の「成長（進化）」を遂げるためには、毎日毎日のたゆまぬ「努力と忍耐と持続的なエネルギーとが必要不可欠になる」が、しかし、それ以外、「中国に勝つ道」はないのである。（完）